

1st day
5.19 Sat.

第31回大会 特別報告

■時間 / 16:30 ~ 17:00 ■会場 / 4F 大研修室

テーマ ● 「人は2度死ぬー自分史は『紙の墓標』」

三浦清一郎

2nd day
5.20 Sun.

第31回大会 特別企画

■時間 / 9:00 ~ 11:30 ■会場 / 講堂

インタビュー・ダイアログ

1部「通学合宿等『生活体験プログラム』の意義と方法」

現代は利便性・効率性を「売り」とする時代である。また、人権の時代は、子どもの欲求を重視する過保護の時代にならざるを得ない。必然的に現代っ子は実生活の「労働」も「困難」も「他者との共同」も知らない。地域の教育力は衰退し、生活体験を教えるプログラムは辛うじて「通学合宿」等に残されるのみとなった。その意義と方法を問いたい。

<登壇者プロフィール>

●朝日 文隆

(福岡県みやま市立江浦小学校 校長)



みやま市立江浦小学校校長。学校主催の通学合宿は平成8年度以来16年目を迎える。現在の参加率は1年生～6年生迄ほぼ100パーセント。子どもが企画する「協働生活体験学習」のプログラムを実施する。「失敗は教育効果を上げる」という視点に徹し、「大人は手を離し、目を離さず」を指導方針にしている。

●鎌田 清一

(福岡県遠賀町教育委員会生涯学習課 元社会教育係長, 現在 高校総体推進係長)



通学合宿は平成8年度から3小学校区単位での持ち回りで開催。現在は町単位で開催している。「生活まるごと体験」を掲げ、通学合宿OB・OGを含む「ボランティアとの協働」を基本理念とし、日程は6泊7日、料理、洗濯、掃除など生活そのものを基本プログラムとしている。

●相戸 晴子

(NPO法人子育て市民活動サポートWill 代表理事)



「NPO法人子育て市民活動サポートwill」代表理事。一貫して子育てグループ活動に関わり、親子の地域参加支援にこだわり続けている。近年はアウトリーチ型の研修会、サロン、交流会などを実践している。2002年日本生活体験学習学会に加入、通学合宿の調査研究活動に参加、子どもの生活体験にはプログラム実践とノンプログラム実践の両輪が必要だと考えている。

<コーディネーター>

●正平 辰男 (実行委員、純真短期大学特任教授)



福岡県教育庁社会教育課主幹社会教育主事、福岡県立社会教育総合センター副所長などを歴任。2003(平成15)年、東和大学総合教育センター長・特任教授、2008(平成20)年4月より現職。1983(昭和58)年より「通学キャンプ」に取り組み。1989(平成元)年度より旧庄内町立生活体験学校での年間20回の通学合宿の企画・実践に参画。2003(平成15)年より、福岡県社会教育委員、福岡県社会教育委員連絡協議会々長に就任。2008(平成20)年2月、特定非営利活動法人体験教育研究会ドングリを結成、理事長に就任。著書に「子どもの育ちと生活体験の輝き～これまでの通学合宿、これからの通学合宿」あいり出版 平成22年7月。「通学合宿・生活体験の勧め」あいり出版、平成17年11月、その他がある。

2部「壊れた地域社会を修復し、『無縁社会』を突破する方法はあるか？」

伝統的共同体が崩壊し、現代人は自由に自分の思いを追求し、自己都合を優先できる時代に生きるようになった。よく言えば「自己実現」、悪く言えば「自己中」の生き方が「無縁社会」を招来し、「個人情報保護法」をつくり出した。「私に干渉しないで！」と一方で言うおいて、「みんなで仲良く、助け合おう。絆の日本」を実現できるか？二人の公民館長に聞きながら会場の分析と意見を聞きたい。

<登壇者プロフィール>

●秋山 ^{ちしお}千潮 (佐賀県佐賀市立勸興公民館 館長)



平成15年から佐賀市立勸興(かんこう)公民館館長。公民館は住民に地域情報を提供し、人々をつなぐ「まちの駅」だと構想し、毎月の第2土曜日を「勸興まちの駅」の祭りとして位置づけ、従来発想とは全く異なった視点で、住民主催の出し物や露店や賑わいを演出した。祭りの思想は「招待」ではなく、「参画と交流」を条件に、年間を通して、多様な協力者を戦略的に呼び集め、公民館に足を運んだことのない人達に合った各種出演と交流のステージを開発した。館長と二人の主事は「仲人」であり、「応援団」であり、「依頼人」でもあり、「演出者」でもあった。多様なプログラムは彼らの支援を得て住民自身が生み出して行ったのである。

●森下 ^{せきや}碩哉 (元福岡県糸島市立南風公民館 館長、現在 糸島市NPO・ボランティアセンター センター長)



平成18年～24年3月まで糸島市南風公民館館長。南風校区運営委員会では9部会を設置し、「交流」と「連帯」を促進する活動を展開している。“子どもは地域のかすがい”をベースに、主に「子どもをキーワードにした事業」、「地域住民が連携協働して実施する事業」に取り組み、施策ごとのプロジェクトチームを設立して取りくんだ。事業の展開にあたっては、多彩な人材の活用、近隣関係に疎遠な若い保護者世代の活動への取り込みを図るため、学校と連携・協働して地域活動を展開し、学校を住民に近づける多様な工夫をした。

<コーディネーター>

●三浦清一郎 (実行委員、生涯学習通信「風の便り」編集長)



国立社会教育研修所、文部省、福岡教育大学などを経て現在三浦清一郎事務所を設立。生涯学習通信「風の便り」編集長。近著に「しつけの回復、教えることの復権」(2008年)、「変わってしまった女と変わりたくない男」(2009年)、「安楽余生やめますか、それとも人間やめますか」(2010年)、「自分のためのボランティア」(2010年)「未来の必要」(編著 2011年)、「熟年の自分史」(2012年)(いずれも学文社)がある。